

兒童の模倣に就て

文學士 倉橋 惣 三

一 模倣の種類

兒童の模倣性は暗示性と共に、兒童と外圍との關係を結ぶ重要な作用である。模倣の種類に就ては、見方によつて色々に分け方が出来る。或は意志的要素の有無によつて分類して、有意的模倣無意的模倣といふ名をつけることも出来る。或は又其の模倣活動の反復の有無によつて一時性及び永續性の別を立てることも出来る。素より同じものを違つた方面から見ただけであつて、いづれを正しとし、いづれを誤りとすべきものではないが、茲には發達の順序といふ見地から次の如き種類に分けて見る。

一 反射的模倣 兒童に於て最も早くあらはるゝ模倣活動は、未だ明確なる意識を先立てずに行はるゝものであつて、之れを反射的模倣といふ。即

ち兒童自らに模倣しようといふ意志があるのではなく、只外圍のまゝを模倣するのである。尚心理學的にいへば、外圍からの刺激が兒童の感覺を通じて兒童に印象を與へると、其の刺激と同じ種類の運動が反射的に行はるのである。元來被暗示性から模倣性に遷つて行く限界については、種々考究を要すべき問題があるのであつて、此の反射的模倣と稱する處のものも、考へ方によつては被暗示活動に他ならぬのである。處で、之れを模倣の部分に入れるか、被暗示活動の部分に入れるか、その議論は暫く措いて、兎に角、斯くの如き事實が幼兒に於て多く行はれる。而して發達的研究からいへば、之れが總ての模倣の始めをなして居るのである。

二 自發的模倣 次に、此の無意的な模倣性が、兒童の意志の發達に伴ふて、次第に有意的模倣になる。併し、單に有意的といふ一つの名稱を以てあらはして仕舞ふのは、吾々成人の場合のことで

あつて、發達の級階を追ふ兒童の場合に於ては同じ有意的なるにも、いろ／＼の種類の存すべきことを忘れてはならぬ。即ち反射模倣の次に來るものは、單なる反射といふに比しては有意的であるが、しかも、其の個々の模倣活動が未だ明確なる目的活動とはなつて居ない處のもので、只見たまゝ、聞いたまゝ、をそのまゝ、其の通り、何故模倣するかといふ譯はなく、模倣そのことが興味となつて模倣するのである。即ち眞の有志的模倣と純反射的なるものとの中間に位するものである。而して之れを反射的模倣に對して、自發的模倣と名づける。俗に所謂猿がよく人眞似をするといふ其の模倣は此種に屬するものである。又普通いふ處の、兒童が模倣性に富んで居るといふのも主として此の意味に於ての模倣である。即ち其の動作の表面若しくは結果に於ては吾々成人の模倣と同じであるが、其の心理的性質に於ては異つて居るところを注意しなければならぬ。模倣作用を一般に

本能として論ずることの可否に就ては多少の疑點もないではないが、多くの人々が模倣を本能だといふのは茲にいふ自發模倣を見ていふのである。即ち本能的だといはれたる程、無目的性のものなのである。

三 戲曲的模倣 之れと無目的性に於て同一にして、表出の形式に於て異なるものに戲曲的模倣といふものがある多くの兒童心理學に於て、此の事實を戲曲本能と稱されて居る程自發性に富んだもの又無目的性なるものである。而して、普通の自發模倣と異なる處は、自發模倣が、其のまゝの模倣であるに對して、之れは變更を加へたる模倣である。即ち見た處聞いた處に、分解と構成との兩作用が加へられて、即ち戲曲的表出がせられるのである。

四 有目的模倣 以上、自發的戲曲的兩模倣は、兒童が其の模倣の手段となる處のものに注意するといふ點に於て意志作用を先だて、居るのである

が、更に、一つの目的が先きになつて、其の目的の爲に模倣作用をすることがある。吾人成人の場合に於ける模倣は多く之れであるが、兒童に於て、此種の模倣があらはれるのは稍長じてからのことである。之れを有目的模倣と名づける。

有目的模倣が其の目的に應じて分解、構成の作用を加ふことは、其の性質上明かなことである。して見ると模倣も此の種のものに至つてはたゞ手本を寫すといふこと、は違つて來る、即ち意志を用ゐて、自己に必要な手本を外圍から撰擇採用することに於て最も著しく行はれ明かに分かることであるが、尙ほ細かに考へて見ると、自發的模倣に於ても矢張り存することである。普通、自發的模倣に就ては、兒童が外圍の刺激をそのまゝに何でも模倣するといふものゝ、之れは實は粗い見方であつて、一個の生物が外圍に適應する場合には

常に其の生物特有の適應をするのが自然である。即ち兒童が如何になんでも模倣すると見えても、實は、それらの兒童に特殊なる模倣をして居るのである。たゞ、そのことが兒童自らの意識作用ではない爲に、有目的模倣の場合の如く、格段なる現象でない丈けである。

二、模倣に對する教育上の注意

以上、兒童の模倣性の種類に就て心理的の説明を試みた後に、此くの如き見地に基く教育上の注意を考究しなければならぬ、但し兒童は模倣性に富んだものである。故に悪き模倣をさせぬ様に彼等の外圍を注意しなければならぬといふことは、勿論必要の注意であるが餘りに知れ切つたことである。再び此種の論を繰り返へす必要もあるまい。併し、此事は理論としては陳腐乃至平凡であるが、事實としては中々困難のことである。そこで、其の困難の結果どうなるかといふと模倣に對する此の積極的注意が、反對に消極的實行と變轉するこ

とが多い。即ち善き外圍を供するといふことが、容易に理想的に實行され難い處から、吾人の實際は禁止の方法に轉するのである。即ち兒童は模倣性に富んだものである。依つて之れをよく取締つて禁止しなければならぬといふ全く消極的方法に陥るのである。

之れは成程實際に於ては已を得ぬことである。少くも或る程度までは已むを得ぬことである。併し、此實際上に於ける已むを得ないといふ承認が理論上の領域にまで侵入し來つて、兒童の模倣性といへば、只ひたすらに其の取締法のみを考究し又論議するの風あるは甚だ遺憾なことである。即ち吾人は、此の曲差富なる兒童の模倣性に就て、單に警戒の方面にのみを思はず、其の價値の論を——是亦單に模倣性の必要といふ漠然たる説のみでなく、其眞價の果して眞に那邊にあるやの研究をしなければならぬと思ふのである。そこで模倣性の教育的注意は二つに分れる。一つは手本に關する

取扱ひであつて、一つは模倣そのものに關する注意である。前者は之れを一般に用ゐられて居る言葉でいへば、兒童に何を模倣さすべきかといふ外圍に關する注意である。處で、いふ迄もなく此の注意は大切である。極めて大分ではあるが此種の論は、常に模倣の結果にのみ重きを置き過ぎて居る。而して此の他にもう一つ大切なる模倣の作用の存することを忘れ勝ちである。悪いことを模倣しては悪いといふのは、いはゞ當り前へのことである。則ち、吾人の特に茲に注意を促し度いのは、此の模倣の作用の方面に就てである。而して此方面に關しては、尙ほ將來の研究を要すべき點が少くないが、その中二三の注意を擧て見れば。

第一、模倣の眞價 模倣の眞價は單にその結果の善惡にあらずして、其の活動それ自身にあるといふことである。殊に一時的の、其時限りの模倣でなくて、多少なり永續性を有する模倣の場合に於て尙ほそうである。即ち模倣の仕上げ如何よりも、

仕上げの途中、即ち経過に於て價值がある。兒童の模倣の際に於ける反復の如きは、成人の目から見ればくだらない繰りかへしに過ぎないものが多い。殊に同じことを幾度も繰り返へすの單調を感じる。殊に同じことを幾度も繰り返へすの單調を感じる。殊に同じことを幾度も繰り返へすの單調を感じる。殊に同じことを幾度も繰り返へすの單調を感じる。

於ては分解、構成の作用を要すること、その活動の経過に於て兒童の精神の發達がある。従つて、**第二、模倣と獨創力との關係** 第二には模倣と獨創力との關係に就ての論が起る。從來模倣の價値に就て充分積極的の意見を有して居る人々でも、模倣性の發達が獨創力を害することを言ふ人が多い。成程、専ら外の手本にのみ依從する模倣と獨創力とは反對のこの様であるが、併し、前途の如く模倣に關する注意が其の結果のみに限らずして、模倣中の作用に着眼せられる、場合には、此心配は必ずしも事實でないのみならず、却つて模

倣作用の發達の間に、實は一種の獨創の養成がなされつゝある譯なのである。蓋し、前から述ぶ通り、模倣は單に個性が外圍から支配されるのみ現象ではなくて、個性が主となつて外圍を選擇、採取する活動なのである。即ち兒童模倣性の教育が單に外圍の顧慮のみから離れて、其の作用の教育に移る時に、獨創力と發達と何等矛盾なきことになるのである。

第三、戲曲模倣の利用 第三には之れとは少し別のことで、教育の實際に關して希望し度いことは、戲曲模倣の利用である。元來一般に模倣は、外圍の事物を反復して充分の理解と、固き記憶とを起させるに効果あるものであるが、戲曲模倣に於て殊に此の効果が大きい。單に目から見、耳から見るといふ外に、之れを模倣して所作するといふ處に、理解を助け記憶を増すの効果あると言迄もない。而して、此の模倣性を如何にして教育上に利用すべきかに就ては、種々實際上の考慮工夫を要する

ことであるが、幼稚園の遊戯的保育に於て、之れが多少利用されて居る如く、小學校殊に其の初級に於ては、學課の種類によつて此の利用必ずしも困難でないと思ふ。但し、戯曲模倣とは必ずしも兒童に芝居をさすといふことではない。最も廣く之れを定義すれば、知覺によりて得たる處を構成的に實行するといふことである。遊戯的に、兒童自ら種々の模倣的動作をさせることも有益であらうし、又箱庭、「サンドアツプ」の如き構造製作をさせることも有益であらう。

此他、兒童の模倣に就き注意すべきことは限りなく多いであらう。併し、吾人の特に茲に繰りかへして注意し度いことは、教育上、模倣性の研究を。たゞに外から兒童に作用する外圍の問題に限らないで、兒童精神發達に重要な一つの内的活動として、之を如何に益々發達せしむべきか（取締のみでなく）、又教育上如何に利用すべきか（警戒するのみでなく）の方面に進め度いことである。

遊戯上に現はれたる

幼兒の模倣性

和田 實

物真似をすると云ふことは、何も幼兒に限つたことではないけれども、真似の由つて來る取を採り模倣の心理を研究する爲めには、幼兒の模倣的行爲を観察することは最も適當なことである。殊に幼兒の自發自由なる其遊戯的活動に就いて之れを観察するときは一層其真相を理解するに都合がよい。そこで別段まとまつた意見としてはないけれども、氣の付きたるまゝの事實に就いて二三記述して見やうと思ふ。

一、最初の模倣（直覺的）

由來幼兒の物真似と云ふものは、随分早くから現はれるものである。若し見る人があるならば生れて數週間の後には既に其萌芽の出現を見るに相違ない。ブライエル氏は生後十日ばかりの時に口